#### ふなまじま 船間島古墳

(川内市港町510-1番地)

## 位置と環境

船間島古墳は、川内川河口の右岸の標高26.5mほどの丘の頂上に位置する。また、川内川に架かる最長の橋である河口大橋のたもとにあたる。もともと船間島は、その名が示すように島であったが、埋め立てなどが進み現在では、地続きになっている。眼下には、川内川及び西側に東シナ海が広がり、まさしく大河の河口の島に築造された古墳である。

#### 調査の経緯

調査は、昭和61年(1986)から川内市教育委員会において、市内に所在する古墳の踏査をはじめ、古墳記述の文献の洗い直しの調査を実施し、川内市内古墳調査関係文献表を作成



写真 1 船間島古墳遠景

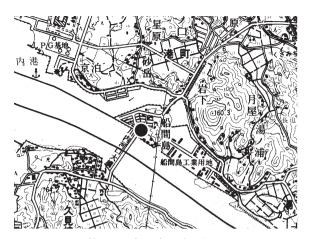
した。

これまで、市内の墳丘を有する古墳は、先学者に よって、石室あるいは石棺の計測等を含む内部施設 について報告されていたが、古墳の地形を測量する までには至っていない。

そのために、昭和62年度の事業として、船間島古墳、端陵古墳、安養寺丘古墳(宮里古墳)を対象に地形測量を実施した。また、この調査は鹿児島県歴史資料センター黎明館と共同事業であった。

## 遺構と遺物

船間島古墳は、島の頂上部に造られた直径17m、 高さ2mの円墳である。墳頂は平坦になっており、



第1図 船間島古墳の位置

そこに木造りの祠が建っている。その中に蓋石が一 枚で覆った状態での石室がある。

石室の形態は不整形で、規模は奥行き123cm、幅103cm、高さ78cmであり、板石を持送り状に積み上げている。石室内部や天井石の内面の一部には、朱が塗られている。

この石室は、その形状が不整形なことや周辺に多くの板石が散乱していることや天井石の一部にしか 朱が塗られてないことから、石室の一部を再構築し た可能性がある。

従来の文献では、船間島古墳が地下式板石積石室 墓として取り上げられているが、ほかの同型の古墳 にくらべ、構造的(石の積み方など)に異なってい ることや島の頂上部に単独で存在していることなど から地下式板石積石室墓でない墓制との見方がある。

同古墳は、墳丘を有することがより明確になった とともに石室の構造も竪穴式石室墓の形態であるこ とが地形測量の調査で判明した。

なお、出土遺物は、これまで発見されたとの報告 例はない。

#### 特徴

従来,川内川流域は、地下式板石積石室墓が分布 している地域であるが知られている。

この地下式板石積石室墓は、この流域のほかに熊本県南部、天草諸島及び長島にも分布する。また、志布志湾沿岸地域、宮崎県南部及び川内川上流域に見られる地下式横穴墓と薩摩半島南部及び大根占町に分布する立石土壙墓とともに隼人の人々の墓制と考えられている。

一方,川内川の下流域には,地下式板石積石室墓及び土壙墓を有する横岡古墳,石蓋土壙墓及び箱式石棺墓が発見された御釣場古墳,墳丘を有する船間島古墳・安養寺丘古墳・端陵・中陵及び若宮古墳などが見られる。この地域には,南九州独特の墓制の3タイプの内,地下式板石積石室墓が存在し,畿内文化の影響を受けたといわれる高塚古墳とともに存在している。

下流域に見られる高塚古墳は,ほとんど発掘調査 が実施されていないため,詳細は不明である。

船間島古墳もその一つではあるが、立地として大河の河口の島に造られていることは、川内平野を含め、この地に畿内文化の影響を受けた権力者の存在があったことを意味するのではないかと考える。

船間島古墳も含め、御釣場古墳・安養寺丘古墳・ 端陵・中陵及び若宮古墳など今後の発掘調査をする ことで川内平野に存在する高塚古墳の特性が分かる とともに船間島古墳の重要性も判明するであろう。

## 資料の所在

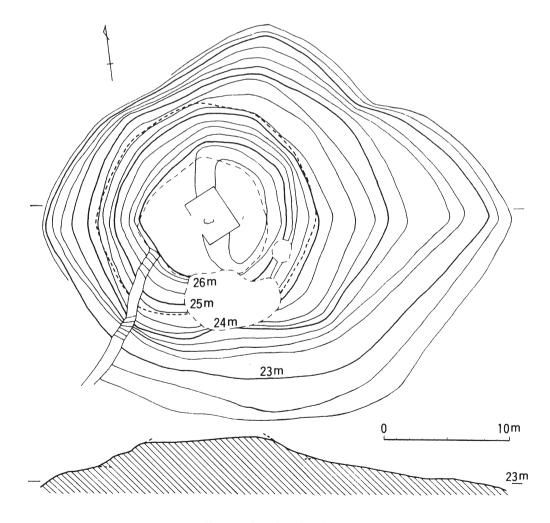
船間島古墳は、昭和46年(1971)に川内市指定文 化財の史跡に指定され、現状で保存されている。

# 参考文献

川内市歴史資料館1987「昭和61年度版」『川内市歴 史資料館年報』

川内市歴史資料館1988「昭和62年度版」『川内市歴 史資料館年報』

(中島哲郎)



第2図 船間島古墳の地形図